

中国の図書館における資料デジタル化視察報告

むらまつ かつら
村松 桂

(メディアセンター本部)

1 はじめに

2011年3月13日から21日までの9日間、財団法人東洋文庫現代中国研究資料室の方々と共に、中国における資料デジタル化の状況を把握するため、中国北京市・杭州市・上海市の図書館視察に同行する機会を与えていただいた。日々図書館資料のデジタル化に携わる立場として、以下に簡単ではあるが訪問した順を追って報告させていただきたい。

2 北京大学図書館

3月14日に訪問した北京大学図書館は、700万冊以上の蔵書と5万m²以上の延床面積を誇る「アジアで最大規模の大学図書館」として知られる(写真1)。700万冊の蔵書のうち150万冊が古典籍(うち17万冊が貴重書)であるため、学内におけるデジタル化の重点も古典籍に置かれているが、そのほかにも1949年以前で北京大学図書館のユニーク・コレクションと呼ばれるような資料を現物保存の目的でデジタル化したり、後述するCADALに参加したりとデジタル化に対する積極的な姿勢がうかがえる。



写真1. 北京大学図書館

デジタル化作業は2002年から開始され、現在約10万冊が終了したが、それでもデジタル化が必要な資料のうち1割程度という。図書館内にはデジタル化センター(写真2)が設置され、専門スタッフ13名が日々デジタル化作業に従事しているのだが、デジタル化センターの運営資金を大学が出しているため、デジタル化の対象は図書館資料だけではない。拓本撮影専用のバキューム装置つき撮影台(写真3)

や、冊子撮影用の複写台、裁断可能な資料をスキャンするフラットベッドスキャナの他にも、動画の撮影機材や編集ブース、ポスター出力のための大判プリンタ等の機材が揃えられ、大学内のデジタル化全般を一手に担っている印象を受けた。ただ、デジタル化センターで扱う図書館資料はCADAL用のものと、裁断可能な近代の資料のみであるため、貴重書撮影に使用している機材との比較がその場では出来なかったことが残念である。

デジタル化センターの他、150万冊の古典籍を所蔵する地下書庫や、古典籍修復係の作業場を見学させていただき、資料保存や修復に関するお話を伺った。

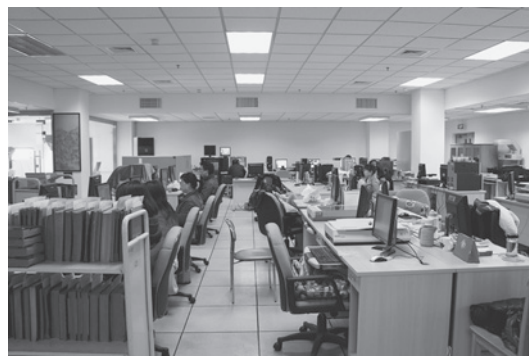


写真2. 北京大学デジタル化センター



写真3. バキューム装置つき撮影台

3 中国社会科学院近代史研究所

翌15日に訪問した中国社会科学院近代史研究所は、中国の国家的な学術機構である中国社会科学院の研究所の一つである。約60万冊の近代史資料を所蔵しており、胡適や南満州鉄道株式会社（満鉄）の新聞切抜き、文化大革命期の壁新聞などのアーカイブを中心にデジタル化を行っている。デジタル化に関しては自館で行う作業（現在約100万ページ終了）に加えて、国民党党史館、台湾国史館、スタンフォード大学、コロンビア大学など外部機関との協力関係のもとに進められている。

自館でのデジタル化作業は現在のところ中断しているとのことで作業現場の見学は叶わなかったが、図書館長その他の方々から現在の中国における書籍・資料のデジタル化について、概況を把握するのに大変有意義なレクチャーを受けることができた。レクチャーによると、中国のデジタル化は、

- (1) 国家プロジェクト（国家図書館、清史編纂委員会等）
- (2) 大学図書館（CADAL等）
- (3) 中国科学院（自然科学系の国家アカデミー）
- (4) 中国社会科学院（人文社会系の国家アカデミー）
- (5) 公共図書館
- (6) 民間企業

という6つの系統に分かれており、資金や管理面での都合上、系統内では協力しているものの、それぞれ独自にデジタル化を進めている状況にあるという。

レクチャーの後、デジタル化済みのアーカイブ画像を閲覧することのできる「電子閲覧室」(写真4)や、アーカイブ資料の現物等を見せていただいた。



写真4. 中国社会科学院近代史研究所の電子閲覧室

4 浙江大学図書館

15日夜に北京から杭州市へ移動し、翌16日には浙江大学図書館(写真5)を訪問した。浙江大学は中国において最も歴史ある大学の一つであり、6つのキャンパスにある図書館の総面積は約6万m²、600万冊以上の蔵書を誇る。またデジタル化にも積極的に取り組んでおり、CADALの中国における中心拠点という役割を担っている。



写真5. 浙江大学図書館

CADAL (China Academic Digital Associative Library) とは、中国における“Million Book Project”として、アメリカのカーネギーメロン大学、中国やインド、タイの高等教育機関、Internet Archive 社やIBM 社等が参加し1999年に開始された資料デジタル化のプロジェクトである¹⁾。中国においてCADALは国家プロジェクトの一つとしてとらえられており、2009年までの第一期に中国政府から7,000万人民元、アメリカの協力機関から200万ドルの支援を受け、約100万点のデジタル化を実現している。第一期では主として1911年～1949年の民国期資料等をデジタル化の対象とし、現在までにおよそ30万回のアクセスがあったという。続いて2009年からは第二期が開始され、3～5年計画で150万冊のコンテンツ追加や協力機関の拡大、また「デジタル貸出し」やクラウドサービスなど、新しい利用者サービスの充実を図るべく作業が進められているようである。

実際のスキャニング作業は、Internet Archive 社への委託により、深圳市にあるデジタル化の工場で1ページ10セントという価格で進められているが、浙江大学内にも玉泉地区新キャンパスの図書館最上階にデジタル化センターが設置されている(写真6)。ここでは現在約26人が1日2～3万ページを目標にスキャニング作業を行っていて、資料のスキャンからOCR処理・校正、メタデータ作成や画像

海外レポート

チェックにいたる一連の作業は、北京大学デジタル化センターにおけるフローとほぼ同様のものになっている。画像合成ソフトを独自に開発したという大判地図用撮影台(写真7)や、書道資料のスキャニングのために導入したドイツ製のオーバーヘッド型非接触スキャナなども設置されていた。



写真6. 浙江大学デジタル化センター



写真7. 大判地図用撮影台

5 浙江大学歴史系

17日には浙江大学の歴史系を訪問した。2007年から独自にデジタル化を進めている龍泉市の地方法院アーカイブについて、実際の画像を閲覧させていただきながら裁判所資料のデータベース化に伴う問題や今後の課題などについてのお話を伺った。

6 上海図書館

続いて18日には、上海にある上海図書館(写真8)を訪問した。上海図書館は北京にある中国国家図書館に次いで第二の公共図書館であるが、上海「市」図書館というよりは国の図書館といった役割が大きく、蔵書も約5,000万冊(うち特に貴重な古典籍19万冊)、1995年に建てられた現在の建物は面積およそ8.3万m²と、非常に規模の大きな施設となっている。もともと1958年に4つの図書館が合併して設立

されたが、1995年に情報研究所と合併したことで、資料の現物保存に加えてデジタル化やデジタル情報の発信に力を入れるようになり、デジタル化にも1996年という比較的早期から取り組んでいる。現在、貴重資料のデジタル化はほぼ終了したとのことであるが、様々なプロジェクトの元で年間500万ページほどのデジタル化作業が各地に点在する作業場で進められていて、その多くは上海市内の業者への入札方式による業務委託という形式をとっている。

館内見学では、族譜閲覧室や展示室に続いて雑誌資料の収蔵庫を見せていただいた(写真9)。北京の国家図書館では図書、上海図書館は主に雑誌という方針で収集された資料が保管されており、民国期の雑誌に関して言えば、マイクロフィルムからデジタル化したもの・直接デジタル化したものを合わせると、約半数のデジタル化が完了している。また、現在民国期の資料をスキャニングしているというデジタル化センターの見学や上海図書館が独自に制作したデータベースの紹介、さらには「電子図書館プロジェクト」の説明などを受けた。施設の大きさやプロジェクトの規模には圧倒されるばかりで、視察日程の締めくくりとしてたいへん思い出深い時間となった。



写真8. 上海図書館



写真 9. 上海図書館収蔵庫

7 おわりに

日ごろ、どちらかと言えば欧米におけるデジタル化の状況に目が向きがちだった筆者にとって、今回の中国視察は新鮮な驚きであるとともに、「お隣」の国に対する自分の無知を反省する機会にもなった。デジタル化先進国である欧米（特に米国）の手法を学び、マス・デジタイゼーション（大量電子化）に対する意識を統一させて「工場」的なワークフローを確立している現場を見ると、デジタル化に対する国家的な意気込みを直に感じることができる。例えばCADALは中国と米国の重要な共同プロジェクトであり、日本にとっても大いに参考になる点が多いにも関わらず、先方のお話によると日本から見学者が訪れたのはこれが初めてとのことであった。

また今回の視察がきっかけとなって、帰国後2011年7月15日に「電子書籍・資料のいま：日本と中国」と題した共催シンポジウムが東洋文庫内で開催された(写真10)。このシンポジウムの趣旨は、日本で中国研究に携わる研究者の方々や日本・中国の電子書籍ベンダー、日本で書籍の電子化に取り組んでいるの方々等に講演していただくことで、日本と中国における電子化事情をアカデミックとビジネスの視点で、また利用者と提供者の視点で見つめ直すことであった。参加者は100名を超え、日本におけるこれからの取り組みを考える上でも重要な機会になったと言える。今後も中国のデジタル化の動向に目を向け、国内でのこうしたネットワークを拡げつつお互いに協力しながら電子化に取り組んでいきたい。

最後になるが、今回の視察では東洋文庫現代中国研究資料室の高田幸男先生をはじめとして、関係者の方々へたいへんお世話になった。この場を借りて心からの感謝の意を表したいと思う。

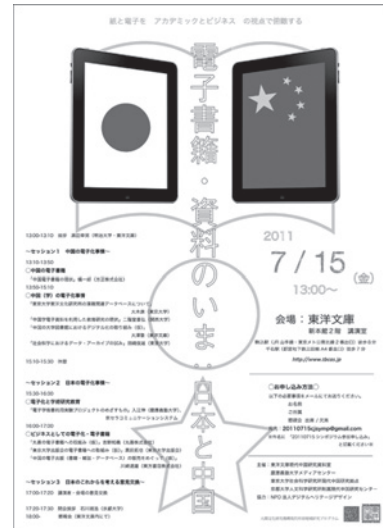


写真 10. シンポジウム「電子書籍・資料のいま：日本と中国」チラシ

参考文献

- 1) 篠田麻美. 中国における Million Book Project：中国の大学図書館の資料電子化戦略. カレントアウェアネス. 2008. 12, no. 298, p. 13-16.